

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：35412

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23329

研究課題名（和文）C. ムフ政治思想の教育学的射程

研究課題名（英文）The educational range of Chantal Mouffe's political theory

研究代表者

山中 翔（Yamanaka, Sho）

広島文化学園大学・学芸学部・助教

研究者番号：50847332

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではベルギーの政治学者シャンタル・ムフの政治思想を全体的に把握し、その教育学における射程を検討した。そこで、ポスト・マルクス主義における主要概念「言説（discourse）」、「節合（articulation）」や「ヘゲモニー（hegemony）」といった概念に焦点を当てた。ポスト・マルクス主義からはあらゆる社会関係が言説によって構築されたものに過ぎないという立場が導かれる。本研究は以下の2点を明らかにした。（1）教育言説の構造を紐解くとともに、新たな言説の創出に貢献すること、（2）イデオロギー批判の方法論を示唆すること。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は以下の2点を明らかにした。ムフの政治思想（とりわけポスト・マルクス主義）は（1）教育言説の構造を紐解くとともに、新たな言説の創出に貢献すること、（2）教育におけるイデオロギー批判の方法論を示唆すること、が明らかになった。総括すると、ムフ政治思想（とりわけ前期）は言説の作用が主題となっており、これは教育学の体系や教育にはたらく政治性を読み解くうえで有効な視点となる。以上の点において、ムフ政治思想は教育学に貢献しているのだが、その一方で経済の観点が弱く、この点において限界がある。

研究成果の概要（英文）：This study examines educational implications of Chantal Mouffe's Agonistic Democracy. We focus on the main concepts of post-Marxism: discourse, articulation and hegemony. Post-Marxism leads to the position that all social relations are merely constructed through discourse. This study clarified two points. First, to unravel the structure of educational discourse and to contribute to the creation of a new discourse, Second, to suggest a methodology for ideological criticism.

研究分野：教育哲学

キーワード：闘技民主主義 シャンタル・ムフ ヘゲモニー マルクス主義

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本では政治や市民性のあり方を模索する動きが高まった(小玉 2016, p.145)。そして、2011年の東日本大震災以降、専門家のみならず、市民による判断の重要性が高まっていること(前掲書, p.186)や、18歳選挙権の導入などを背景にこの動向は更なる高まりをみせている。このような背景を踏まえたとき、シティズンシップ教育のあり方を提示することは教育学の現代的課題であるといえよう。

この課題への応答として、教育学では熟議アプローチにもとづくシティズンシップ教育が提唱されてきた(Ruitenberg 2009, p.269)。この立場において、子どもは理性的な対話にもとづいて合意を導くプロセスを経験するなかで、市民としての能力(理性や市民としての徳)を身につけるとされる。しかし、ムフの政治思想を援用しつつ、このアプローチにもとづくシティズンシップ教育が特定の市民像の押し付け(合意や理性といった価値へのコミットの強要)になる危険性を含んでいることを指摘する先行研究がある(Ruitenberg 2009; Biesta 2011)。

確かに、ムフは理性や合意形成の欺瞞性を鋭く指摘しており、それが熟議アプローチにもとづくシティズンシップ教育を批判する際の理論的根拠として有効であることは否めない。しかしながら、教育学におけるこの認識は一面的であるといわざるを得ない。なぜなら、先行研究はムフの中期思想のみを重点的に取り上げており、その全体像を把握することができていないからである。この限界を踏まえるならば、前期、中期、後期という一連の流れのなかにムフ政治思想を位置づけ、その教育学における射程を明らかにすることが求められる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、教育学において看過されてきた前期・後期のムフ政治思想に焦点を当て、教育学におけるムフ政治思想の射程を明らかにすることである。言い換えれば、熟議アプローチに対する批判の理論的根拠としてのムフ理解を更新することにある。マルクス主義の再構築やポピュリズム分析等の様々な要素から成り立つムフ政治思想は政治学の領域を超えて、多大な思想的影響を与えてきた。しかしながら、教育学における先行研究は中期のムフ政治思想(理性や合意形成がもつ欺瞞性の解明)にのみ着目している。前期・中期・後期という一連の流れのなかでムフ政治思想を捉えようとする本研究の立場には、学術的独自性がある。

より具体的に述べるならば、上述した Ruitenberg や Biesta のように先行研究の多くは、ムフ政治思想(特に中期思想)を援用しながら、熟議アプローチにもとづくシティズンシップ教育の限界を指摘している。ただし、これらの研究はマルクス主義の再構築から始まるムフ政治思想を全体的に把握することができていない。ムフ政治思想がシティズンシップ教育の文脈において有効な示唆を与えることを認めるとしても、その教育学における射程が十分に検討されているわけではない。本研究は、ムフ政治思想を部分的に抽出するのみでは、その教育学における射程を明らかにすることはできないという立場をとる。そして、膨大なムフの著作群および彼女に関連する研究者らの議論(代表的には、彼女のパートナーでもあったエルネスト・ラクラウ)を分析することを通じて、ムフ政治思想の全体像を明らかにする。本研究は先行研究におけるムフ理解を更新し、その教育学的意義の拡張を目指すものであるともいえよう。

## 3. 研究の方法

計画書では、シャンタル・ムフが所属するウェストミンスター大学民主主義研究所を訪問し、彼女にインタビューを実施することを計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により断念せざるを得なかった。

そこで、本研究では前期ムフの著作 *Hegemony and Socialist Strategy* (1985) を中心に、ポスト・マルクス主義や日本の教育学におけるマルクス主義受容に関わる著作などの精読を通じて、その教育学的意義を検討した。なお、後期ムフの著作で展開されているポピュリズム論については十分に検討することができなかった。

## 4. 研究成果

本研究では、第一に、前期ムフ政治思想、すなわちポスト・マルクス主義(マルクス主義の再構築)における主要概念や問題意識に焦点を当てた。ポスト・マルクス主義はマルクス主義における階級還元主義および本質主義を批判し、「言説(discourse)」や「節合(articulation)」といった概念を駆使して、これを克服する。ここから導かれるのは、あらゆる社会現象を隈なく説明する根本的原理は成立し得ず、そうした体系ですら言説によって構築されたものに過ぎないという立場である。そして、こうした知見は、教育言説の構造を紐解き、その本質主義的な傾向を明らかにする。本研究ではこのことを示すために、日本の教育学におけるマルクス主義受容を取り上げた。ポスト・マルクス主義にもとづくと、日本の教育学におけるマルクス主義受容には二つの本質主義がある。それは第一に、教育目標としての主体の一元化。第二に、教育問題の資本主義への還元である。二つの本質主義は「人間=主体」の育成を通じた社会変革、すなわち共産主義社会の実現というプロジェクトを未来の子どもに託す「大きな物語」(リオタール)として機能した。けれども一方で、教育問題の所在は経済に還元され、その外部は周縁化された。ま

た、教育目標も資本主義に抗する主体へと矮小化された（山中 2020）。

第二に、ムフのヘゲモニー論に焦点を当てた。彼女のヘゲモニー論はローザ・ルクセンブルク、カウツキー、レーニン、グラムシというマルクス主義の系譜を継承するものであり、とりわけグラムシに強く影響を受けている。グラムシはヘゲモニーを大衆の同意によって構築されるものとして捉えたが、ムフはこれを感情の動員を通じた「われわれ」の構築として読み替えている。

こうした知見は、教育的な言説の構造を紐解くとともに、新たな言説の創出に貢献する。ムフのヘゲモニー論は文化伝達の言説から中立性という仮面を引き剥がし、そのイデオロギー性および、そこに従属させられていた諸要素を明らかにする。さらにこのように転覆させられた言説を再節合することによって、別様の教育のあり方が示唆されるだろう。もう一つは、教育におけるイデオロギー批判の方法である。それは人間の理性というよりも、情念に働きかけることによって一つの対抗的なヘゲモニーを構築する。ムフのヘゲモニー論が示唆するのは、対等な関係によって営まれる討議の空間ではない。むしろ、必ずしも対等でない関係のもとで繰り広げられる同意調達の空間—同一化可能なイデオロギーや表象を提示し、情念を動員するゲーム—として描かれる（山中 2021）。

本研究は、熟議民主主義批判に焦点が向けられがちだったムフ政治思想において、その前期思想、すなわちマルクス主義の再構築に着目し、その教育学的意義を明らかにした。この点において本研究はこれまでの教育学におけるムフ理解を更新したといえよう。しかしながら、ムフ政治思想を全体的に把握したとはいいがたい。今後はポピュリズム論を踏まえたうえで、その意義を検討していきたい。

#### 【参考文献】

Biesta, G. *Learning Democracy in School and Society: Education, Lifelong, Learning, and the Politics of Citizenship*, Sense Publishers, 2011.

小玉重夫『教育政治学を拓く』勁草書房、2016。

Ruitenbergh, C. *Educating Political Adversaries: Chantal Mouffe and Radical Democratic Citizenship Education*, *Studies in Philosophy and Education*, 28(3), 2009, pp.269-281.

山中翔「教育学におけるマルクス主義受容に関する批判的考察 E. ラクラウ=C. ムフのポスト・マルクス主義に着目して」教育哲学会第64回大会、2020。

山中翔「C. ムフのヘゲモニー論とその教育学的意義」『教育学研究紀要』第66号、2021、pp.31-36。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山中翔	4. 巻 -
2. 論文標題 教育学におけるマルクス主義受容に関する批判的考察 E.ラクラウ=C.ムフのポスト・マルクス主義に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学会大会発表原稿集録	6. 最初と最後の頁 pp.130-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中翔	4. 巻 66
2. 論文標題 C.ムフのヘゲモニー論とその教育学的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山中翔
2. 発表標題 教育学におけるマルクス主義受容に関する批判的考察 E.ラクラウ=C.ムフのポスト・マルクス主義に着目して
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山中翔
2. 発表標題 C.ムフのヘゲモニー論とその教育学的意義
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------